

応援する人・される人

志津小学校長 辻 太久郎

ある学年の体育の時間、その日は短距離走でした。一人ずつ粛々と記録がとられていく中、突然子どもたちの大歓声が沸き起こりました。何かと見てみると、それは一人の少年に送られたものでした。その子は体育があまり得意ではないようで、いつもは見学していることが多い児童です。しかし、その日は意を決し、短距離走に挑みました。それを目の当たりにした同級生たちの、自然に生まれた「がんばれ〜！」の大声援だったのです。

オリンピックでは、多くの名場面や記憶に残る感動のシーンが生まれます。もちろん、スーパースター選手が大観衆の期待に応え、大記録を打ち立てるシーンも感動的ですが、同じくらいいやそれ以上に人々の心を打つのが、不利な状況や困難をあきらめず乗り越えようとする選手の姿ではないでしょうか。1984年ロサンゼルスオリンピック・女子マラソンでは、ガブリエラ・アンデルセン選手（スイス）が脱水症状で意識も朦朧とする中、文字通りふらふらになりながらゴールを目指す姿は、人々の感動を呼び、オリンピック後も何度もメディアに取り上げられました。2000年シドニーオリンピック・男子水泳100m自由形では、ほとんど泳げないエリック・ムサンバニ選手（ギニア）が溺れそうになりながらも、最後まで泳ぎ切ったときには、会場はスタンディング・オーベーションでその選手をたたえました。2014年ソチオリンピック・女子フィギュアスケートで、浅田真央選手は日本の期待を一身に受けて競技に臨みましたが、ショートプログラムでミスが多発し16位。残す競技はフリーのみとなり、メダル獲得は絶望的でした。それでも「最高の演技を応援してくださる皆さんのために」と奮起、142.71点と自己ベストを更新し3位となる大健闘でした（最終総合順位は6位）。演技が終わった瞬間、天を仰ぎあふれ出そうになる涙をこらえ、そして笑顔で観客に応える彼女の姿は、日本中、世界中の人々を感動させました。私は、こうしてワープロを打っている今も、あのシーンを思い出して泣きそうです。

不利な状況にある人、困難に直面している人、弱い立場の人を応援したくなるのは、人間の本能に近いものだと思います。心理学的にもそのような効果があると言われています。しかし、不利なら困難なら弱者なら、誰でも応援したくなるかという点、そうとも限らないそうです。この「応援したくなる心理」が発動しやすくなる最重要条件は、不利な人・困難に直面している人・弱い立場の人自身が努力し、一生懸命に行動していること、だそうです。仲間に惜しめない声援や拍手を送ることできる本校の子どもたちは、本当にすばらしいと思います。彼らのそれは、本能とか心理学的に云々とか、そういう難しいことではなく、ただただ純粋な優しさや高い共感性によるものだと思います。その優しさや共感性を誘発させたのは、苦手なことから逃げ出さず、果敢にチャレンジする少年の姿でした。「心から応援する態度」「心から応援される行動」、ひとりの子どもの中にこの二つの姿が共存し、そして互いに影響し合えば、これほど居心地がよく、そして成長し合える空間はありません。人と人とが時間と空間を共有することの意味がそこに生まれます。志津小学校が子どもた

ちにとってそのような場となるよう、今後とも取り組んでまいります。

まん延防止等重点措置や緊急事態宣言が出されている中、感染防止や自粛とは程遠い行動をする人々の姿が報道されています。毎日、我慢や自粛の生活を続けている子どもたち、保護者の方々、教職員のことを思うと、やりきれない気持ちになります。しかし、今社会全体が「非難する人・される人」という構図になってしまい、閉塞感を助長しているようにも思います。そんな今だからこそ、頑張っている人々に着目し「応援する人・される人」となり、重苦しい空気を換気するときではないかと思えます。